

Youth Post

有始有終

1

2026
vol.

111巻第1号 発行2026年2月1日

編集・発行 日本青年団協議会

〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町4-1日本青年館5階

TEL 03-6452-9025 FAX 03-6452-9026

MAIL dan_news@dan.or.jp

Web <https://www.dan.or.jp/>



INFORMATION

日本青年団協議会の最新情報はこちらから



子どもによる企画の数々だけでなく、
振る舞われるディナーもクリスマス会の
楽しみ
(島根県隠岐郡知夫村)

地域活動ラボ

地域青年による活動はその多岐にわたる活動を通じて、まちや地域が活気づくだけでなく、人間関係の応答をとおして自分のできことが増えたり、視野が広がるという、いわば地域を担う者を育むという重要な意味を持つ。日本青年団協議会が主催する「全国地域青年『実践大賞』」は、各地の取組を集め、有識者によって評価される貴重な機会である。本企画では、実践大賞に応募された取り組みを審査に携わった審査員自らが分析し、活動の社会的な意義を明らかにしていく。昨年から始まった新連載「地域活動ラボ」。第10回目となる今回は、岡山県岡山市を拠点に活動する「岡山県青年団協議会」の「令和6年能登半島地震現地ボランティア活動」について紹介する。

【取り組み概要】

審査員 萩原 建次郎 氏
(駒澤大学総合教育研究部
教職課程部門教授)

2024年1月1日に発生した能登半島地震の発生後、岡山県青年団協議会では自分たちで何かできることがないか模索した。

どこから動けばよいのか悩み、倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会に相談をした。すると「まずは現地を見た方が良い」というアドバイスを受け、同年4月に能登半島の震災被害の視察に行くことに。現地の状況とそこでの実感を元に、相手に迷惑のかからない形で、かつ自分たちがやりたいことではなく、できることで支援にならないかを検討した。その結果、支援ボランティアを現地に派遣する8月に3泊4日のバス企画に行きました。

実行委員会を立ち上げ、具体的な活動計画、準備、派遣資金、支援金集めなどを行った。事前研修会では、日本赤十字職員を講師に「ボランティアの心構え」「応急措置演習」も実施。現地では被害の大きかった輪島市、珠洲市を中心で活動。廃材撤去や屋内片付け、地域行事への出店、避難所での炊き出し、避難所訪問などを行った。ボランティアには地元大学生、高校生、社会人、青年団員、26名が岡山から参加。主催者のほか、石川県青年団協議会、バックアップメンバーを加え、38名での

ことです。このような現地ニーズに基づく発想を優先した点が評価できます。

◆迅速な対応と周到な準備

6月には第1回実行委員会を開催し、活動内容を具体的に練り上げられたこと、また日本赤十字職員を講師に招き、「ボランティアの心構え」や「応急措置演習」といった事前研修を企画・実施されたことは、安全かつ質の高い支援活動につながったことと安心して活動に臨めたのではないでしょう。

◆多世代の参加者と地域連携

ボランティア募集に26名が参加、さらに石川県青年団協議会や参加されたことは、団体の活動の幅広さと、社会貢献への意識の高さを示しています。このような多様な個人・組織が協力することで、より多角的な視点からの支援が可能になります。

特に、石川県青年団協議会と



事前に現地視察を行い石川県青年団協議会と連携する

月刊 社会教育

毎月17日発売!

創刊1957年。実践家と研究者による市民のための社会教育総合誌。公共施設や教育施設における社会教育はいまどうあるべきか。毎号幅広いテーマで社会教育の在り方を見つめます。

定価：本体 741円+税

◎旬報社 TEL03-0041 東京都新宿区早稲田鶴巣町544 中川ビル4F
TEL03-5579-8973 FAX03-5579-8975 http://www.junposha.com/

日本青年館ホール

検索

「日本青年館ホール」で検索、もしくは右記QRコードより読み取りください。

TEL:03-6447-5660
ACCESS: 東京メトロ銀座線 外苑前駅2番出口より徒歩5分

執事は日本の社会教育と
全国の青年団を応援しています。

12~2月の日青協の動き 日韓青少年指導者交流事業

この間の日青協役員の動きを、紙面をお借りして読者の皆様にご報告いたします。よりリアルタイムな情報は、日青協公式インスタグラムにて発信しておりますので、併せてご覧ください。フォローお待ちしております。

韓国ソウル市および京畿道地区で日韓青少年指導者交換事業を実施し、杉山会長と棚田事務局長が訪韓した。韓国では国策として青少年育成が進められており、9歳を対象に全国約360の施設が無料で運営され、主に共働き家庭の放課後の居場所として機能している。複数の学校区をまたぐ交流により、校外の人間関係が育まれている点が特徴的です。施設は最新設備が整い、スマートフォン依存への専門的ケアも導入されていた。あわゆる点が素晴らしいです。これは、災害支援におけるボランティアの心構えとして最も大切なことがあります。これはとくに若者年代にとって大きな強みです。

能登半島地震発生後、早期に現地視察を行っており、被災地の状況を肌で感じられたことは、その後の活動方針を決定する上で非常に重要だつたと思います。単に「何かしたい」という思いだけでなく、「相手に迷惑をかけず、自分たちにできること」という視点を持たれた点が素晴らしいです。これは、災害支援におけるボランティアの心構えとして最も大切なことがあります。これはとくに若者年代にとって大きな強みです。

12月3日から6日にかけて、韓国ソウル市および京畿道地区で日韓青少年指導者交換事業を実施し、杉山会長と棚田事務局長が訪韓した。韓国では国策として青少年育成が進められており、9歳を対象に全国約360の施設が無料で運営され、主に共働き家庭の放課後の居場所として機能している。複数の学校区をまたぐ交流により、校外の人間関係が育まれている点が特徴的です。施設は最新設備が整い、スマートフォン依存への専門的ケアも導入されていた。あわゆる点が素晴らしいです。これは、災害支援におけるボランティアの心構えとして最も大切なことがあります。これはとくに若者年代にとって大きな強みです。

魅力発掘

◆知夫村青年団

知夫村青年団は、島根県隠岐郡知夫村を拠点に活動する青年団である。かつて島の祭りやイベントを担つていた旧青年団は、20年ほど前に自然消滅していた。

現在の団員は約60名で、大人の島留学やーチャーで移住してきたメンバーも多く所属する。

きっかけは、コロナ禍明けに抱いた危機感だった。近年、島には移住者が増えている。彼らが島のために汗を流す姿を見て、地元出身者の胸に問い合わせが浮かんだ。

「俺たちはこのままいいのだろうか」と考えた有志5名が集まり、青年団の結成を決意した。

しかし復活には逆風もあった。旧青年団を経験した大人たちから反対されたのである。長年村の行事を担つてきた彼らには、重責から解放された安堵感もあった。下廣団長^{しもひろ}らは「先輩たちの手は煩わせない」と押し切り、結成に踏み切った。子どもの頃、当時の青年団がつくってくれた楽しい時間。その背中を手本に、今度は自分たちが届ける番である。

団員たちは仕事の忙しさや家庭の状況に応じて、参加できるタイミングで活動に関わる。仕事も家庭も青年団も、無理なくバランスをとる。おかげで活動を苦に感じたことはないという。令和の時代にふさわしい、新しい青年団のかたちがここにある。

前号よりスタートした新企画「魅力発掘」。

2ページのActionにて取り上げた実践を行う青年団の活動やその活動地域を深堀り、その魅力を紹介する企画です。第2回となる今回は、島根県隠岐郡知夫村を拠点に活動する知夫村青年団の魅力を発掘します！！

知夫村青年団

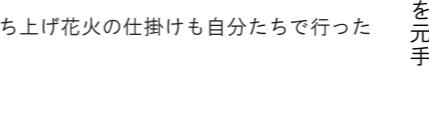
◆活動紹介「途絶えた祭りを自分たちの手で」

青年団は24年の復活以降、途絶えていた島の祭りを次々とよみがえらせてきた。

春には、知夫小中学校のグラウンドで野だいこん祭りを開催した。この祭りは、かつての青年団が長年取り組んできた、山開きを祝う春の風物詩。6年ぶりの復活となつた今回は、有志による隠岐民謡や踊りが披露され、屋台も立ち並んだ。

夏には、お盆の夜空に約200発の花火が打ち上がった。25回目を迎えた知夫村花火大会である。盆期

間中は帰省者で島の人口が約2千人に膨れ上がる。「島外にいる孫にも花火を見せたい」という声に応え、お盆開催にこだわってきたが、花火業者が繁忙期に来島できず、開催が危ぶまれた。そこで団員らが自ら講習を受け、打ち上げ技術を習得。住民からの寄付を元手に、自分たちの手で花火大会を成功させた。途絶えた行事を嘆くのではなく、どうすればできるかを考える。その姿勢が青年団の活動を支えている。



打ち上げ花火の仕掛けも自分たちで行った

◆地域のこと

知夫里島は、隠岐諸島の島前地域に位置する周囲約27kmの島だ。コンビニも信号機もなく、散策中は人よりも牛やタヌキに会う機会が多い。島前カルデラを一望できる赤ヶ山や、火山の噴火跡がむき出しになつた赤壁など、小さな島とは思えない雄大な自然が広がる。島では大人全体で子どもを見守る文化が根づいている。下廣団長によれば、誰かが抱っこしている子が、その人自身の子どもとは限らないという。家族の絆を越え、島全体が一つの大きな家族のようだ。

最後に、クリスマス会でも腕を振るつた島のグルメを紹介したい。来居港の目の前にある「ニューポート」は、知夫里島黒毛和牛を使用した特製カツ丼が名物だ。数年前に移住してきたシェフが営む古民家フレンチ「Chez SAWA」では、島の特産品をふんだんに使つた料理が味わえる。そして島唯一のお菓子屋さん「めにーでーる」。季節の果物を使ったケーキが人気で、来居港の売店でも購入できるレモンケーキはお土産にもおすすめである。



クリスマス会で振る舞われた料理の一部。サーモンのカルパッチョやブルスケッタ、味の沁みたおでんは冷えた体にぴったり



前号から始まったみなさんの想いや考え方を交換する新企画。

どなたでも投稿できる掲示板です。投稿する内容はちょっとしたことOK！

新聞への感想・事業の告知・報告、日頃考えていることや悩み、ちょっと誰かに

伝えたいことなどなど、なんでもお寄せください！

滋賀県にて青年団教宣コンクールを開催♪

1月18日(日)に第40回滋賀県青年団教宣コンクールを開催しました。教宣活動を大切にしていきたいという思いから続いている本事業。今回は初めて審査会の場に市町の青年団員が立ち合い、審査員に自分の言葉で作品に込めた熱い想いを伝えてくれました。教宣活動にかける想いが「波紋」として広がり、今回の教宣活動の取組が今後の青年団活動に生かされ、「波紋」として広がっていけば嬉しいなと願っています。(滋賀県・滋賀県青年団体連合会・富長 弘宣・30代)

*編集部注：確かな情報を伝えることで理解と判断の土台を広げ、対話から人々の考えを見る化し、活動や生活の視野、さらには関係性を広げていく取組のこと



宮城県青年問題研究集会を行いました！

1月17日・18日、宮城県青年問題研究集会を開催しました。

初日は日本青年団協議会元会長の中園謙二さんを講師に招いた講演に加え、体験研修としてeスポーツ大会を実施。食事を交えた交流も大いに深まりました。

2日目は2グループに分かれて分科会を行い、それぞれの悩みや課題を共有。今後の活動に向けたモチベーションが向上する、実りの多い時間となりました。

(宮城県・富谷市青年団・長 純晟・20代)



Youth掲示板投稿募集♪

投稿はどなたでも可能です！

右記二次元コードからぜひお寄せください。

皆さんの投稿をお待ちしております！



平和活動のあるべき姿

若者に伝えるべきは、平和を「願う」ことではない。争いを生む自己欺瞞を排し、理性を鍛錬することだ。平和とは、規律ある知性発揮の産物である。(奈良県・無所属・大淀 仰理・30代)



2025年度も残すところ2カ月、新年の浮ついた空気はもはや消えた。自分たちの活動と方針を照らし合わせ、言い訳せず自己点検を行う時が来ている。何ができたか、なぜできなかつたか——良くも悪くも積みあがつた実績から目を背けることは、この間の自分たちの努力を否定することに等しい。

青年団活動において重要な要素の一つは、地域貢献（社会貢献）である。団体が長く続く理由があるとすれば、それは役割を自覚して行動してきた結果、社会から認められてきた経過があるため。団員らの「自分たちが楽しいと思える活動を」という言葉は、活動の延長線上に地域社会からの重い期待があるという不条理を、誰よりも理解しているからこそ出る覚悟の裏返しではないか。

しかし、自分さえ楽しければいい、という理屈では組織は長続きしない。できないことが罪ではないが、自らの甘えや弱さを棚上げし、見えもしない高みを仰ぎ、誰かが運んでくる「魔法の解決策」を夢見る。その甘えが、組織を内側から腐らせるのだ。

自らに信を問い合わせることが肝要だ。活動は仕事ではないため、見過ごす選択もできる。人が引き付けられるのは、自ら進み、迷い、壁にぶつかりながらも進む姿である。そこで求められているのは、自分自身が常に初心を忘れず、本質を見つめ続けようとする姿勢だ。等身大を忘れた虚勢は、仲間や地域にとって苦痛でしかない。まずは地に足のついた学びと取組を称え合い、嘘のない歩みを始めよう。

若者は
なんでもできる



五箇山に都会から移住した愛らしい若者がいる。名は長岡悟さん。出身は埼玉県で、学生時代に東京都武蔵野市のセカンドスクール事業で訪れたのがきっかけである。その時都会にはない人とのつながりを感じ、「不便な環境でもたましく生きらる起因は何か」と考えたと

いう。そして令和2年、富山県南砺市の中利賀村（五箇山地域）に移り住んだ。旧利賀村は標高1000mの山々に囲まれていて、交流人口の増加がついていくだろう。

は着実な地域活性につながる。たくましく生きる長岡さんを中心、その輪は今後さらに広がっていくだろう。



「人とのつながりこそ
地域活性」

長岡 悟さん（28）

（利賀村青年団、
五箇山連合青年団）

No.64

●森井 勇真（日本青年団協議会執行理事）より投稿

編 集 後 記

並の人間よりもAIの方が優秀と言われる時代となった。世界中の知見を活用できるAIは、「素人の意見」の意味を喪失させていくだろう。では、その時代に私たち普通の人は何をするのか。またAIの判断に全て任せようとする人間を、果たして人間と呼んでいいものか。人間とは一体何なのか。「最後は人間対人間だから」という根拠ない言説を、批判的（≠否定的）に捉え直す時代が来ているように感じる。（ひ）



<https://www.facebook.com/nisseikyo01/>



れこめんど

あまり知られていない小さな場所や食べ物…地元のおすすめを青年団のエピソードも交えてご紹介します。

瀬戸内海に浮かぶ小豆島は、オリーブや醤油、穏やかな海と歴史が息づく、人と自然が近い島です。市町村合併により平成18年3月に「小豆島町青年団」へ統合し、これまでの活動も継続しています。中でも「寒霞渓クリーンハイキング」は30年以上続く事業で、毎年11月下旬に登山道表12景を登り、裏8登を下り、紅葉を楽しみながらゴミ拾いをしています。続けてきた中で、ゴミの量も段々と減ってきました。寒霞渓は国定公園第1号に認定されており、貴重な文化財で、紅葉シーズンは絶景です。四季折々の魅力を持つ小豆島。その魅力をこれからも青年団活動を通して発信していきます。



●西川 佳子（香川県連合青年会・日本青年団協議会執行理事）より投稿